

「ポスト真実」と政治の可能性
小山 花子（盛岡大学）

日本語の「そもそも」とは「基本的に」という意味で、バラク・オバマはイスラム国の創始者なのか？

上記は昨今において少なからぬ人びとを当惑させた政治家の発言のほんの一例である。

政治の場における事実の軽視が、甚だしさを増していると言われている。2016年には「ポスト真実」(post-truth)が時代を特徴づけるキーワードと喧伝された。「ポスト真実」とは、事実よりも感情が優先される事態であると定義される。がそれは、多元的な寛容さの時代を拓くものではなく、この感情こそが「真理」であり、自分たちの感じている・欲していることこそが唯一正しいものなのだという絶対主義的な世界観を伴っていることを忘れてはならない。その意味では「ポスト真実」の時代とは、歪んだ真実性の時代なのだ。真実を標榜するものが、権力の裏付けを得て行進する時代なのかもしれない。それは真実の形式的価値だけが増大した時代といえるかもしれない。なぜなら真実の内容というよりは、何かが真実であると言い放つその作法あるいは、真実が存在するというその決意表明こそが物を言うように思えるからだ。「客観的真実」を標榜するものが誰にも分るような単純な形で素早く、例えば、「3分間」で伝えられることが歓迎される時代という点で、それは科学文化と消費文化の融合体であるかもしれない。

本報告では上のような「ポスト真実」の時代をどのように見るべきなのか、アーレントの政治思想の枠組みを用いて考察を試みたい。

アーレントの思想は一見すると「ポスト真実」的な諸説を流布させている右派的なスタンスとは明確に距離を置いている。アーレントはそもそもホロコーストの「罪」を追及した思想家である。アーレントはまた、「ポスト真実」という語のルーツと目されるニクソン時代の「ウソ」の噴出に困惑と危機感をあらわにしていた。そうした意味では、アーレントを「ポスト真実」に対抗する「ファクトチェッカー」たちの友人に数えてみたくもある。がそこには、いかにもアーレントらしい変化球がある。アーレントはその政治思想の重要な一画をなす著作（「真実と政治」「政治におけるウソ」）の中でウソについて考察しているが、そこではウソを語るという行為と政治を行うこととの間に紛れもなく「親和性」が存在すると主張しているのだ。アーレントによると、政治的に行為する人は本質的に「ウソをつく人」である。ならば、今政治の場において、「ポスト真実」あるいは「ウソ」が跋扈することもやむなしという悲観的なスタンスへと至るのかということ、おそらくはそうではない。彼女の他の書き物は、その思想が今風の「ポスト真実」のポピュリズム的政治を容認するものではないことを雄弁に語っている。

本報告では、アーレントの政治思想の中から以下の3つの主張を引き出し、今日の「ポスト真実」の政治情勢に対する示唆を得ることを試みたい。

- ①全体主義は「論理性」を志向・標榜する。
- ②真正なる政治は、「意見」の形成に関わるものである。

③「事実」は政治の地表である。

いかなる政治体制であれ、何らかの主張を正しいものとして擁護することなしには存立しえないだろう。それが自由や人権などのリベラルな主張である場合もあれば、そうでない場合もある。しかし全体主義の場合、主張が生み出されるその過程そのものに力点が置かれる。正確には、一つ的前提が他の前提を導くという、論理的演繹のイデオロギー的な「運動」そのものが、その主張の正しさを伝えるものと位置づけられる。過程の重視といっても、これは、リベラルな手続き主義とは全く異なるものである。アーレントは、全体主義の論理の「運動」が究極的には「単独者」としての個人に訴えるものであると述べている。

アーレントによれば、「事実」は政治の「地表」である。政治は、「事実」に立脚し、その上に芽を出すのである。この「事実」を守ることはそれ自体は、政治の仕事ではないとアーレントは一方では述べる。「事実」を守るとは何かを語ったり、伝えたりする行為であるが、それはアーレントによれば本来議論の余地のない何か（要するに事実、真実）に関わるものであり、複数の答えを許すものではない。「事実」は「真理」の一種であるというアーレントの言明からもそのことは窺える。にもかかわらずアーレントが、「事実」は政治的でもあり、複数者としての人間に関わるものであると他方で述べるのはなぜだろうか。アーレントのこの指摘は、全体主義後の世界を暗黒卿的に描いている。すなわち全体主義後の世界において、原理（平等、自由など）のみならず事実もまた、多数派の「権力」によって守るべき合意事項の一つになってしまったということである。